

ボランティア団体「森林との共生を考える会」(会員数120人)を立ち上げて10年が過ぎました。日本の森林を守るために、木を伐つて使い、山にお金を返し、再び植林するというサイクルの大切さを伝える活動です。市民に呼び掛け、枝打ちや下草刈り等の森林整備や、森林・林業のことを伝えるフォーラムや「木の住まいの勉強会」を行っています。昨年は20年6月の岩手・宮城内陸地震で大規模の崩落があった所に広葉樹を植えまし

緑のエッセー



来ないとのことでした。木を運ぶトラックの運転手から林業機械のオペレーターに転職した若者、内装業から木こりに転職した50代のおじさん、造園業の車で乗り付けた70代のお爺さん等。木に関わる仕事の入り口は広いと感じた講習会でした。(講習2日目に直径50センチメートルほどの立木をみんなの助けを借りながら伐り倒しました。)

私本来の仕事は、国産のスギや青森ヒバを使った住まいを設計し建築するこ

き、国産の木材を使う環境への縛りが必要ではないかと思いましたが。東北地方の市町村では地域振興ということで地域材を使った学校や老人福祉施設等多くの木造施設が建設されていますが、都市に近いところほど木の公共建築物が少ない気がします。都市部に住む人にこそ木造施設が必要ではないかと思えます。林野庁として、木の良さのPRがもっと必要でしょう。

戦後植林された日本の森林は伐期を

住空間工房代表
2級建築士・インテリアコーディネーター・宅地建物取引主任者
雑誌「シルバン」発行・編集人(別冊号含めて11冊発行)
NPO法人森林との共生を考える会設立・
現在理事

た。植樹には地域の植生を乱さないため自生するブナやナラなどの苗を掘りとりしたものを使用しました。今年の植樹のために地域で採ったドングリを植えて芽を出すのを待っているところです。

先日、会の活動に役立つのではないかと思います。チェンソーの安全講習を受講しました。2日間(16時間)の講習には様々な人たちがたくさん参加していました。林業を業とする人はこのチェンソーの講習を受講しないと林業の仕事に従事出

とです。これまで関わった仕事は新築と増改築大小合わせると100件以上です。木造建築の利点は大工棟梁の技があれば、比較的容易に大改造出来ることです。スギの柱や梁は表面に表し、壁や床に無垢の板を使うことで、木の優しさと力強さを感じさせる空間を作ることにかけています。

昨年公共建築物に木を使うという法律が施行されましたが、国産材を使うことに対し強制力はないということを聞

迎えています。国産材の需要を増やすことを考えなければなりません。そのヒントを求めてヨーロッパ等に出掛け、森林の状況や木材利用のアイデアを探しています。木材が住宅以外にも様々な用途があることを学び、活動や仕事の中で多くの人に伝えたいと思っています。今年には国際森林年です。森林との共生を考える会では森林年にふさわしい活動を企画し、新たな森林との関わりを探していきたいと思えます。